令和5年度

私立学校若手教員全国研修会・私立学校中堅教員研修会

（北日本・宮城会場／西日本・広島会場）

実施報告

研修テーマ

探究を磨く

ー私学ならではの個性的な学びをデザインするー

令和４（2022）年度より新たに実施された高等学校学習指導要領において、「探究学習」がキーワードとなり、変容する社会に生きる子どもたちに今、求められる課題解決能力等の育成に「探究学習」が有効とされている。

本研修会は、その効果を最大限に引き出すために必要不可欠な、教員の指導力の向上を図り、私立学校だからこそ描ける探究学習に磨きをかけ、バージョンアップする機会とした。

〇実施概要

北日本・宮城会場

会　　期	令和５年８月19日（金）～令和５年８月20日（土）	
会　　場	TKP ガーデンシティ仙台 （宮城県仙台市青葉区中央１－３－１　AER30 階）	
	若手教員全国研修会	中堅教員研修会
	17 名／50 名（34.0%）	31 名／50 名（62.0%）

西日本・広島会場

会　　期	令和５年９月22日（金）～令和５年９月23日（土）	
会　　場	広島コンベンションホール （広島県広島市東区二葉の里３丁目５番４号　広テレビル）	
	若手教員全国研修会	中堅教員研修会
参 加 人 数	20 名／50 名（40.0%）	40 名／50 名（80.0%）

〇参加対象 都道府県私学協会に加盟の私立中学校・高等学校・中等教育学校に在籍する若手教員（経験年数 5～10 年程度）、中堅教員（経験年数 10～20 年程度）で、学校長が推薦する者。

〇参 加 費 **15,000 円**（昼食費２回含む／両研修会・両会場共通）

〇基本日程（両会場共通）

時刻	8	9			10			11			12			13			14			15			16			17	
	45		15		45			45	0			15	30			30									45	0	
１日目		受付	開会式	研修１				趣旨説明	研修２				休憩(昼食)	研修３											解散		
２日目		研修４										休憩(昼食)	研修５										アンケート記入	閉会式	解散		

○**実施日程**（両会場共通）

	時間	プログラム	
一日目	9:15 9:45	開会式 1.開会 2.主催者挨拶　**吉田　晋**　一般財団法人日本私学教育研究所理事長 3.所長メッセージ　**平方邦行**　一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長 4.閉式	
	9:45	**若手・中堅合同・研修１**	
	   10:45	講演「**探究力で未来を創る－３つの視点で『求められる資質・能力』を探る－**」 講師　**長塚篤夫**　順天中学高等学校校長（一般財団法人日本私学教育研究所副理事長）	
	10:50 11:00	趣旨説明　**広石英記**　東京電機大学副学長	
	11:00	**若手・中堅合同・研修２**	
	  12:30	講演「**探究型授業のデザインと実践**」 講師　**石井雅章**　神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授	
		休憩	
	13:30	**若手・研修３**	**中堅・研修３**
	   16:45	講義・ワークショップ 「**探究学習のサポートの秘訣**」 講師　**広石英記**　東京電機大学副学長	講義・ワークショップ 「**探究の質を高める『問い』とは？**」 講師　**伊藤貴昭**　明治大学文学部教授
	時間	**プログラム**	
二日目	9:00	**若手・研修４**	**中堅・研修４**
	   12:15	講義・ワークショップ 「**探究学習**」×「**情報活用能力の育成**」 講師　**泰山　裕**　鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授	講義・ワークショップ 「**建学の精神を活かす探究学習のデザイン**」 講師　**広石英記**　東京電機大学副学長
		休憩	
	13:15	**若手・中堅合同　研修５**	
	   16:30	講義・ワークショップ 「**探究を磨く～私学ならではの個性的な学びのデザイン～**」 ファシリテーター　**広石英記**　東京電機大学副学長	
		休憩・アンケート記入	
	16:45 17:00	閉会式 1.開式 2.講評　**森　　涼**　学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長（※北日本・宮城会場） **菅沼宏比古**　学校法人西海学園理事長（※西日本・広島会場） 3.修了証授与 4.閉会	
	17:00	解散	

私立学校初任者研修等事業検討委員

氏名	所属	担当
森　　涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長	北日本・宮城会場
菅沼宏比古	学校法人西海学園理事長	西日本・広島会場／北日本・宮城会場

私立学校〔若手教員研修・中堅教員研修〕運営委員

役名	氏名	所属	担当
運営委員長	**森　　涼**	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長	北日本・宮城会場
運営委員	**土屋登美恵**	駒沢学園女子中学高等学校校長	
	伊藤　佳貴	大同大学大同高等学校教頭	
	家氏　宏育	姫路女学院中学高等学校校長補佐	西日本・広島会場
	北田　京子	神戸女学院中学高等学部教頭	
	田部　雅昭	梅花高等学校教頭	
	安田　　誠	箕面自由学園中学校教諭	

開会式

主催者挨拶／吉田　晋・一般財団法人日本私学教育研究所理事長

開会に際し、主催者を代表して吉田理事長より挨拶があった。

私立学校の教員は、数年ごとに移動が義務づけられている公立学校の教員とは異なり、各学校の建学の精神や教育理念に沿い、長期的な視野に立って教育ができる。公立学校ではその時期に国や教育委員会からの要請に応じた教育をしなければならない。高校進学率が 98%に上る現在、私立学校は生徒にしっかりとした「人となり」を身に付けさせることが重要である。高校は大学進学率が特に重要視される傾向にあるが、何よりも生徒が社会に出た時に、責任能力のある人間に育てるべきだと考える。生徒の学力は一人一人異なり、生徒に寄り添い成長を見守ることができることは、私立学校の特権といってよい。

若手教員と中堅教員が融合し、その学校の教育を発展させ、変革し、守っていかなければならない。故に先生方こそ、各学校の資産である。先生方一人一人の力で学校は成り立っている。ぜひプライドを持ち、時には意見を交わしながら、生徒たちのために優れた教育をしてほしい。この２日間、多くのことを学び、有意義な時間となるよう祈念する。

所長メッセージ／平方邦行・一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長

続いて平方所長より、参加者へメッセージが送られた。

本研修会のテーマは「探究を磨く」で、探究に関する活動が満載のプログラムになっている。私たちは日々、探究的な姿勢を維持できているだろうか。プレゼンテーションの写真は、広島にある平和大橋だが、これはイサム・ノグチの 1952 年の作品で、題名は「死ぬ」「生きる」から「いく」「つくる」に変遷を経たものとして知られている。彼は日本人の父親とアメリカ人の母親の元に生まれ、東西のアイデンティティに苦しみながらも、生涯にわたって探究を続けた一人の人物といえる。第二次世界大戦勃発後は両親が敵対する勢力に属し、平和への願いを強めた。北海道のモエレ沼公園は 189 ヘクタールの広大な敷地で、その全てが彼の作品である。創造力が無ければ実現できない偉業である。

2022 年度から導入された学習指導要領には創造性という言葉が全教科に明記されており、受験知から探究知への転換が促されている。私たちは創造性を育まなければならない。各教科の授業で創造性を培うことは難しいが、実践する必要がある。

キャリアの長さにかかわらず、教育が何処へ向かうのか、全ての教員が考える必要がある。２日間の研修を有意義なものとし、成果を上げられることを願っている。

若手・中堅合同／研修１：講演「探究力で未来を創る－３つの視点で『求められる資質能力』を探る－」／
長塚篤夫・順天中学高等学校校長（一般財団法人日本私学教育研究所副理事長）

長塚講師は「今、世界の教育は進化しようとしており、その進化の鍵は探究力にあるとされているため、皆さんと一緒に考えていきたい」として、求められる資質能力について解説した。

１．社会に求められる資質能力

毎年、本校から４名の生徒がオーストラリアのブリスベンに留学し、世界の最先端の教育に触れている。そこで行われている授業のように、ペーパー試験だけでは評価できない、創造力を要する探究的な教育を世界は目指しているが、日本では未だに大学入試で１点刻みの合否判定が行われている。世界は到達度を、日本は正解・不正解を評価している。2013 年にイギリスのマイケル・A・オズボーンが発表した論文によれば、教員は AI で置き換えられにくい職業に分類されているが、教員の役割は「知識を教えること」から「自分で学べる力を習得させること」へ変化している。AI に置き換えられにくい職業に必要な資質能力として共通しているのは、創造性と社会性であり、特に異質・多様な社会の中で発揮される創造性や社会性が求められている。

２．学校に求められる資質能力

今回８回目の改訂となった学習指導要領では、資質・能力（コンピテンシー）に焦点を絞り、「知識・技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力」の学力の３要素として強調されている。最も重要視されているのは「学びに向かう 力」、つまり主体的に学習に取り組む態度であり、「探究力」に他ならない。探究を基盤とし、全教科の学力向上が目標とされている。探究的な学習評価に関し、各校の評価基準の作成は必要不可欠である。

筆記試験以外の主な評価方法として、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価、そしてそれらの基準となるルーブリック評価がある。探究学習の評価は「学校が設定する評価基準により、期待する資質・能力が発揮されているかどうかを把握し、多面的で、学習の過程を評価する評価方法であることが重要」とされている。調査書における総合的探究学習の記録、特別活動の記録の評価についても、各学校が設定する資質・能力の観点が必要になる。

３．本校が求めている資質能力

本校は、1834 年に和算の大家である福田理軒が大阪で創立した私塾（順天堂塾）が起源で、「自然の摂理にしたがって、真理を探究する」ことを建学の精神としている。明治時代に東京へ移転し、戦後、校舎を現在の地に移転している。 2000 年以降、国際社会で活躍できる人間を育成することを教育目標に取り組んできた。

本校が育てたい資質・能力は創造的学力、国際対話力、人間関係力の３つである。本校が SGH に指定された際に作成した基準ルーブリックに沿って、生徒は毎年度当初にそれぞれ自己評価する。また、高校初年次に「探究とは何か」というガイダンスを実施し、以降の総合的探究学習は土曜日に取り組んでいる。学校設定科目の英語探究では地域の子ども食堂で子どもたちに英語を教えたり、カンボジアの子どもたちに英語を Web で教えたりするなど精力的に活動しており、探究報告会では全生徒が各自の探究成果を発表している。ある卒業生で、医学部に進学し、学生時代のうちにアフリカに診療所を創設した者がいる。後に高等学校家庭科の教科書にも掲載されたが、彼は「世界には多様な価値観があり、それを理解する必要性を高校時代の担任教員から学んだ」と振り返っている。探究精神を将来に活かすことを、彼は身を以て示してくれた。

個人も、学校も、国家という単位であっても、資質・能力が変われば未来が変わる。最後はこの言葉で締めたい。

Thank you（探究）！

趣旨説明／広石英記・東京電機大学副学長（一般財団法人日本私学教育研究所特別招聘研究員）

続いて本研修会の監修者である広石講師より、本研修会の趣旨説明がなされた。

全国の私立学校で既に始動している探究学習について、均一化を図るのではなく各々で磨き上げることを目指して本研修を構想した。私立学校の探究学習の実態は千差万別で、各校の探究学習、すなわち各校の磨くべき探究学習の「原石」の磨き方は様々である。各校の現在の探究を、それぞれが磨けるよう２日間の研修の枠組みをデザインした。

全体をジグソー法に見立て、明日の研修５では、一定の条件が与えられた架空の私立学校を想定し、若手と中堅がそれぞれ学んだ知識・スキルを結集して探究学習のデザインに取り組むワークを実施予定である。研修を経て、皆さんが各校の建学の精神に則り、学校の所在する地域のリソースを活かして独自の探究学習を構築できるようになることが目標である。

若手・中堅合同／研修２：講演「探究型授業のデザインと実践」／
石井雅章・神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授）

石井講師は、本講演の目的は「学びのプロセス」の観点から探究型授業のデザインと実践について考えることであるとし、「どうすれば学びが向上するか、学生たちと試行錯誤を繰り返す中で探究学習に辿り着いた」と述べ、講演をスタートさせた。

学習指導要領において、総合的な探究の時間で「自己の在り方、生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していくこと」を目指すとされている。ではそのような課題とどのように出会うか、「探究の時間」においてどこまで扱うのかが問題となる。

学びのプロセスにおいて、課題は所与のものではなく、学習者自身の中に創出されるものであり、探究の過程は他者との相互作用を通じて課題が認識され、再定義され、そして問いが繰り返し生まれるプロセスではないかと考える。

具体的な事例として「休耕地活用プロジェクト」を紹介する。このプロジェクトでは大学周辺の休耕地を地域資源として捉え、地域のステイクホルダーと連携しながら大学教育の一環として活用した。自分たちが生きる基盤のしくみと重要性について体験的に学ぶ機会の創出であったといえる。解決したい具体的な課題から問いが生じ、他者との相互作用を通じて様々に展開していった好事例である。

以上のように、探究学習のデザインは、目的を中心に考え、学習者が課題を創出する過程を重視し、探究の過程全体を提示することが肝要であり、ICT を探究プロセスの支援に不可欠なツールとして考えるべきである。

若手／研修３：講義・ワークショップ「探究学習のサポートの秘訣」／広石英記・東京電機大学副学長

広石講師は学びの構造について解説し、探究は本質的な学びの姿勢であるとの説明がなされた。また、探究学習においては、何より「問い（課題）の設定」が重要であり、教師が生徒の素朴な疑問に対して、多面的な視点から「問いかける」ことで、生徒が自ら「問いを育てる」サポートが必要である。さらにワークシートを使用して各校の探究学習の現状の分析を促し、その上で私学ならではの探究学習の骨格について解説がなされた。

若手教員には学校内で積極的に提言する協働者としてのフォロワーシップが求められること、生徒の学びをサポートする伴走者としての役割が期待されていることなどが指摘された。

中堅／研修３：講義・ワークショップ「探究の質を高める『問い』とは？」／伊藤貴昭・明治大学文学部教授

伊藤講師は、本研修の目的は「『問う』こと自体の価値を再確認する」、「質の高い『問い』を生み出すためのヒント（方法）を得る」と説明し、グループに分かれ様々な資料を題材に疑問を出してみるワークを行った。その上で、アウトプットした疑問を「閉じた問い」と「開いた問い」に分類し、それらを変換して仮説を含む問いにするワークを行った。

最後に、探究学習を行う上で、まずは「疑問を持つ」ということの重要性について、また良質な問いを見極めるための要点を解説した。

若手／研修４：講義・ワークショップ「探究学習」×「情報活用能力の育成」／
泰山裕・鳴門教育大学大学院学校教育学研究科准教授

泰山講師は、参加者と双方向でＱ＆Ａやライブ投票などが可能となるクラウドサービスSlidoを用いて「思ったことを常にアウトプットしながら講義を聴く体験」を参加者と共有しながら講義を行った。GIGAスクール構想により「一人に一台端末」の整備が進み、今後もデジタル社会が加速する世の中において、これから子どもたちに求められる能力について解説した。その上で、「自律的に探究できる子ども」を育てるには、授業においては個別最適に学び、個別最適に支援することが必要であるとした。また「考える」ことの種類は多様であるとし、後半は思考ツールを用いて思考力育成のためのワークを行った。

中堅／研修４：講義・ワークショップ「探究学習のデザインの要諦」／広石英記・東京電機大学副学長

広石講師は、「問いから始まる学びが探究であり、学びに専心することで、子どもたちは能動的な学習者になる」と説明した。中堅教員には管理職と若手教員の間で組織の要となる役割があり、同時に各校の探究学習の全体構成を構想し牽引していくことが期待される。私学ならではの個性的で質の高い探究とは、建学の精神を生かしたGP（育みたい資質・能力）を育成する学びの機会を含めた経験が必要であり、生徒の個性・長所を伸長し、学校や地域のリソースを活かした「現実と関わる」プロジェクト型探究が重要であるとした。

若手・中堅合同／研修５：講義・ワークショップ「探究を磨く－私学ならではの個性的な学びのデザイン－」
広石英記・東京電機大学副学長

２日間の両研修会のまとめとして、広石英記講師のファシリテーションにより、若手教員、中堅教員の合同のワークショップが行われた。先の中堅・研修４で取り組んだ内容を基に、若手教員と中堅教員が混在する４人１組のグループで、５つの異なる地域と一定の条件が設定された４種類の架空の私立学校を、各グループが想定し、私学ならではの探究学習のデザインに取り組んだ。

最後に広石講師は「探究学習は、生徒が自ら学び手になるための『学びの方法』である。従って探究プロジェクト自体の成功は必須条件ではない。重要なのは未知のことに挑戦して失敗し、考える過程で成長していくことである」と述べ、「教育とは学びを支援する行為であり、学習者が幸せに気づく知性や感性を育て、賢明な判断力や行動力を養い、より幸せな世界を築くための資質・能力を育むことである」とし、この観点から、各校の実態に応じて、私学らしい探究の推進を参加者に促し、ワークショップを終えた。

閉会式

【東日本】講評　森涼・私立学校〔若手教員研修・中堅教員研修〕運営委員長（北・東日本）
／学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長

現在、社会は急速な変化を経ており、今後もその変化は加速するだろう。教育界も学習指導要領の改訂が行われ、その中でも特に、生き抜く力を養成する上で「探究学習」が極めて重要であるとの認識が共有されている。昨年１月に発表された中央教育審議会の提言「令和の日本型教育」は、個別最適な学びと協働的な学びの実現を強調しているが、私学においてはデバイスの普及が未完了の状況があり、環境整備が喫緊の課題となっている。

今後の学校の役割は、アルファ世代が厳しい現代社会を成功裏に航行する力を養うことと捉えており、これを担う若手や中堅の教育者には、柔軟で絶えず学び続ける姿勢が不可欠だろう。

当研修会で得られた気づきや知識を、明日からの教育に生かし、学校全体に前向きな変革をもたらすことを期待している。

【西日本】講評　菅沼宏比古・私立学校初任者研修等事業検討委員／学校法人西海学園理事長

当研修会で取り扱った「探究学習」は、学校によって取組み状況が様々であると推察する。しかし世界的な社会情勢の変化の中で、今後は何としても取り組まなければならないだろう。本研修会のテーマである「探究学習を磨く」という観点で見ると、私立学校は公立学校より格段に取り組みやすい土壌がある。各学校の建学の精神を活かし、各学校の生徒たちにどのように取り組ませたらよいかは各自の課題だが、ぜひ、今回の研修で学び得たことを学校に持ち帰り、色々な先生方と共有して仲間を作ってほしい。そして各校のベクトルを１つにし、日本や世界のリーダーシップをとっていく若者の育成に邁進していただけたらと思う。

〇参加者アンケートより

若手・中堅合同／研修１「探究力で未来を創る－３つの視点で『求められる資質能力』を探る－」長塚篤夫・順天中学高等学校校長

〇探究が求められる社会的背景への理解が深まった。（若手・北）

〇ルーブリックに対する生徒との相互評価の必要性に気付けた。（中堅・西）

若手・中堅合同／研修２「探究型授業のデザインと実践」石井雅章・神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部教授）

〇日頃抱いていた疑問を解決することができ、地域に密着した探究のヒントを得られた。（若手・西）

〇様々な事例から大学で学ぶ意義を再確認でき、学ぶ楽しさを生徒にも伝えていきたい。（中堅・西）

若手／研修３「探究学習のサポートの秘訣」広石英記・東京電機大学副学長

〇教師が様々な役割を持ち、学習者の学びのデザインをより良くしていくための方法を知ることができた。（若手・北）

〇探究学習の意義や教育活動での位置づけについて深く理解できた。（若手・西）

中堅／研修３「探究の質を高める『問い』とは？」伊藤貴昭・明治大学文学部教授

〇疑問から問いへの変換の難しさなど、生徒が苦戦する場面を実際に体験することができた。（中堅・北）

〇探究にとどまらず、文章指導や教科指導にも活かせると思った。（中堅・西）

若手／研修４「探究学習」×「情報活用能力の育成」泰山裕・鳴門教育大学大学院学校教育学研究科准教授

〇抽象概念を具体的に考えることで、生徒たちへの関わり方や進め方を見直すことができた。（若手・北）

〇Slido を用いた講義は新鮮で、新しい授業の形をイメージできた。（若手・西）

中堅／研修４「探究学習のデザインの要諦」広石英記・東京電機大学副学長

〇建学の精神と探究学習のベクトルを等しくすることが何より重要だと分かり、すぐに実践したい。（中堅・北）

〇学校に戻り、探究を進める勇気が持てた。（中堅・西）

若手・中堅合同／研修５「探究を磨く－私学ならではの個性的な学びのデザイン－」広石英記・東京電機大学副学長

〇中堅の先生方と実際に探究学習をデザインする体験ができ、本校で実践するイメージが持てた。（若手・西）

〇建学の精神から始める探求学習の組み立て方を実践的に学ぶことができ、大変有意義な研修であった。（中堅・北）

〇都道府県別参加人数

若手教員全国研修会

No.	都道府県名	参加人数			No.	都道府県名	参加人数			No.	都道府県名	参加人数		
		北	西	計			北	西	計			北	西	計
1	北海道	0	0	0	17	石　川	0	0	0	33	岡　山	0	0	0
2	青　森	0	0	0	18	福　井	0	0	0	34	広　島	1	2	3
3	岩　手	1	0	1	19	山　梨	0	0	0	35	山　口	0	0	0
4	宮　城	7	0	7	20	長　野	0	0	0	36	徳　島	0	0	0
5	秋　田	1	0	1	21	岐　阜	0	0	0	37	香　川	0	1	1
6	山　形	2	0	2	22	静　岡	1	0	1	38	愛　媛	0	1	1
7	福　島	1	0	1	23	愛　知	0	1	1	39	高　知	0	1	1
8	新　潟	1	0	1	24	三　重	0	2	2	40	福　岡	0	0	0
9	茨　城	0	0	0	25	滋　賀	0	0	0	41	佐　賀	0	0	0
10	栃　木	0	0	0	26	京　都	0	3	3	42	長　崎	0	2	2
11	群　馬	0	0	0	27	大　阪	1	2	3	43	熊　本	0	1	1
12	埼　玉	0	0	0	28	兵　庫	0	0	0	44	大　分	0	0	0
13	千　葉	0	0	0	29	奈　良	0	0	0	45	宮　崎	0	0	0
14	神奈川	0	0	0	30	和歌山	0	0	0	46	鹿児島	0	3	3
15	東　京	0	1	1	31	鳥　取	0	0	0	47	沖　縄	0	0	0
16	富　山	1	0	1	32	島　根	0	0	0		計	17	20	37

中堅教員研修会

No.	都道府県名	参加人数			No.	都道府県名	参加人数			No.	都道府県名	参加人数		
		北	西	計			北	西	計			北	西	計
1	北海道	1	2	3	17	石　川	0	4	4	33	岡　山	0	1	1
2	青　森	0	0	0	18	福　井	0	2	2	34	広　島	1	16	17
3	岩　手	0	0	0	19	山　梨	0	0	0	35	山　口	0	0	0
4	宮　城	6	0	6	20	長　野	1	0	1	36	徳　島	0	0	0
5	秋　田	1	0	1	21	岐　阜	0	0	0	37	香　川	0	1	1
6	山　形	2	0	2	22	静　岡	4	1	5	38	愛　媛	0	0	0
7	福　島	2	0	2	23	愛　知	1	1	2	39	高　知	0	0	0
8	新　潟	3	0	3	24	三　重	0	4	4	40	福　岡	0	1	1
9	茨　城	2	0	2	25	滋　賀	0	0	0	41	佐　賀	0	0	0
10	栃　木	0	0	0	26	京　都	0	0	0	42	長　崎	0	0	0
11	群　馬	0	0	0	27	大　阪	4	1	5	43	熊　本	0	1	1
12	埼　玉	0	0	0	28	兵　庫	0	1	1	44	大　分	0	0	0
13	千　葉	0	0	0	29	奈　良	0	0	0	45	宮　崎	0	0	0
14	神奈川	0	1	1	30	和歌山	0	0	0	46	鹿児島	0	1	1
15	東　京	3	1	4	31	鳥　取	0	0	0	47	沖　縄	0	0	0
											計	31	40	71